

給へば、宮の御前いとあはたゞしげに覺しめしたり、略中辨の内侍ひるいみじうさうぞきて、さしぐしにもものいみをさへつけて、思事なげなりつる程は、さいふともいかゞと覺しつるに、略下

〔建禮門院右京大夫家集上〕やしまのおとゞ重盛とかや、このごろ人はきこゆめる、その人の中納

言ときこえしころ、五節にくしこひきこえたりしをたぶとて、くれなるのうすやうに、あしわけをぶねをむすびたるくしさしたるが、なのめならぬに、かきてをしつけられたりし、

蘆分のさはる小舟にくれなるのふかき心をよするとをえれ返歌略

〔吉記〕治承四年十一月十九日丁卯、今日五節童女御覽也、略中人々參中宮御方、依可有淵醉也、略中

侍臣等亂遊殆超近年、白拍子之次獻櫛、兩貫首強雖不可獻、依衆議獻之、次雲客推參八條殿、今様朗詠亂舞事畢分散、

〔明月記〕建曆三年十一月十二日、今日風流櫛等構出、送之按察、火桶押錦以櫛爲炭、以白爲灰、櫛廿枚、入之、炬屋一、其薄、櫛爲立部、十三日、御前試了、舞姬退下、略中末座殿上人等入五節所、乞櫛六位藏人等來奪取、蒙

衣雜女又如此、十五日、沐浴、未時欲參仁和寺之間、季嚴僧都來臨相逢、即參御室、依勤今日念佛也、書著到、此次雖異様、所乞取櫛十裏、裏薄様進入於五節所、乞得之由申也、實風流櫛殘等也、十六日、參内候鬼間方、以治部大輔知長給櫛數裏、已爲每年事、依承此事所參入也、

〔建武年中行事十一月〕寅日、殿上の淵醉あり、朗詠、今様などうたひて、三ごんはて、亂舞あり、次第に沓をはきて、女官の戸よりのぼりて、うへをへて御ゆ殿のはざまより下におりて、北のらんをめぐりて、五節所にむかふ、其後所々に參て、すいざんなどあり、后宮、女院など、えんすいあれば、けふあすの程也、けふ御前の試あり、御殿のひさしに亂舞あり、櫛などぞをくめる、

〔近世奇跡考一〕相撲櫛。

元祿の頃を盛りに經たる兩國梶之助と云相撲取、櫛をさし始しより、其頃前髪ある相撲取、櫛を